
ダンボール少年セイタ

龍の骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンボール少年セイタ

【Nコード】

N8956V

【作者名】

龍の骨

【あらすじ】

アルテミスで優勝した山野バンに憧れるLBXプレイヤー木村セイタ。

神社にお参りした時、謎のアタッシュケースを見つける。

その時、アタッシュケースが光り出し、光りに包まれる。

気が付くと・・・戦国武将が女性になっている戦国乙女の世界に飛ばされていた。

※この小説は『ダンボール戦機』の二年後を舞台としています。本編のネタバレが含まれますのでご注意ください。

主人公設定（前書き）

セイタ

「作者、また書いちゃったの？」

龍の骨

「うう、書きたい気持ちが抑えられなくて……………」

セイタ

「連載作品が多いからさ、気をつけようよ」

龍の骨

「はい……………では主人公設定です」

主人公設定

木村セイタ

イメージC V 渡辺明乃

特徴 茶髪のさわやかショートヘアに、青のジャケットを着ており、ジーンパンとスニーカーを履いている。

所有LBX グラディエーター

本作の主人公。ミソラ二中の一年である。アルテミスで優勝したバンに憧れを持っており、これをきっかけにLBXを初め、『強くなったらバンに勝つ』という目標を持つようになる。LBXの腕はバン程ではないが、それなりある。剣を使った戦法が得意であり、銃系は一切使わない（本人いわく標的に当てるのが難しいし、自分には向いていないらしい）。女性が苦手であり（恐らく母親が原因）、避けている事が多く、他の生徒から『ウブなLBXプレイヤー』と呼ばれている。また、目を合わせただけで赤面して気絶するが、正義感が強く、守る物のためなら身体を張って守る程。母親と父親は海外へ行ってるため、近所の叔母に世話になっている。

主人公設定（後書き）

龍の骨

「戦国乙女の世界で、セイタ君は生き残れるのかなあ？　ぐふふふふふ」

セイタ

「さ、作者……顔が怪しいよ……」

龍の骨

「次回は本編です。ふひひひひひ」

セイタ

「笑い方怖いって……!!」

イメージOPとイメージED（前書き）

龍の骨

「イメージOPとイメージEDを思いついたので書いてみました。
OPは戦闘を中心となっておりますがEDは・・・・・・」

セイタ

「言わないで!!!!」

イメージOPとイメージED

イメージOP『1ドリーム』

セイタはグラディエーターを持ち、左腕の腕輪が光りだしてグラディエーターの鎧を来た姿グラディエーターアーマーになり、右手にグラディウスと左腕にはラウンドシールドを持ち、パワースラッシュを放ち『ダンボール少年セイタ』のタイトルロゴが出る。

ミツヒデとセイタが剣の鍛錬をしており、それを見守るヒデヨシとノブナガとロウエン。

ヨシモトとイエヤス、ケンシンとシンゲンとマサムネ、ソウリンとモトチカとモトナリ、オウガイとムラサメとコタロウの順に場面は変わる。

グラディエーターをメンテするセイタとスタイリッシュ・ガンナーをメンテするロウエン、それを見るヒデヨシとミツヒデ。

多数の等身大デクーを率いたオウガイ達が現れ、それぞれ武器を構えるノブナガ達。

パワースラッシュでデクー達を切り裂くグラディエーターアーマーのセイタとデクー達の頭上に弾丸の雨を降らす『ストーム・ブラスト』で倒していくスタイリッシュ・ガンナーアーマーのロウエン。

非情ノ大剣でデクー達を蹴散らすノブナガ、天翔追打岩撃でデクー達を倒し、ミツヒデが朱雀剛爆碎で放ったくないがデクーの頭に刺さり、機能停止する。

ヨシモトの烈風真空波で矢がデクー達の胴体に刺さり爆発し、マサムネの双竜連斬でデクー達が真っ二つになる。

イエヤスの光魔葵ノ陣でデクー達は爆発し、シンゲンの炎竜軍配撃でデクー達は吹き飛び、ケンシンの雷光連撃槍でデクー達は破壊される。

目の前にいるウルファングアーマーの姿になっている餓狼がおり、セイタとロウエンは飛びかかる。

グラディエーターはセイタの肩に乗り、後ろにいるノブナガ達と並んだ。

イメージED 『トキメキ一途』

涙目のセイタは走りSD化し、背景はミソラ二中のスラムになっている。

その途中、SD化した四天王のリコとギンジとテツオとリーダーの郷田が出てくる。

そして背景は商店街に移り、SD化したバンとカズとアミとダイキとロウエンが出てくる。

セイタは目を瞑りながら走り、背景は体操服ブルマ姿のヒデヨシとセーラー服姿のノブナガとナース服姿のミツヒデが映る。

次にネコミミメイド姿のイエヤスとバニーガール姿のヨシモトと婦

警姿のケンシンとシンゲンとゴスロリ姿のマサムネが映る。

そして背景が神社の前になり、セイタはその場で止まり、息を吐く。普通の状態なセイタは、顔を上げると頬を赤くしたヒデヨシがおり、セイタは思わず顔を赤くし、ヒデヨシは抱きつき、セイタは驚く。

セイタは気が付き、周りを見ると自分の部屋になっており、ほっとするようにため息をつく。

イメージOPとイメージED（後書き）

小次郎

「やあ、北島模型店の北島小次郎だ」

セイタ

「ちよつとお！？店長出てきちゃったよ！？」

小次郎

「セイタ、お前飛ばされたんじゃ・・・」

セイタ

「それは次回の本編ですから！」

小次郎

「そうか、次回から店長のダンボール少年セイタの豆知識を紹介しようと思うんだ」

セイタ

「いわゆる豆知識コーナーですね」

小次郎

「そういう事になる、次回からよろしくな！ではまた、バトルスタート！」

セイタ

「大丈夫かなあ？」

第一話 運命の腕輪との出会い（前書き）

龍の骨

「さあ始まりました！本編の第一話でございます！」

セイタ

「不安だなあ」

龍の骨

「自分に自身を持てよセイタあ」

セイタ

「わ、分かったよ。それでは、第一話、バトルスタート！」

第一話 運命の腕輪との出会い

【ミソラタウン 河川敷】

川の近くでDキューブを展開し、LBXバトルをしている少年達がいた。

Dキューブの中では、ブルド改とグラディエーターが戦っていた。

「よし、これでどうだ!」

グラディエーターを操作している少年、木村セイタ。

「ブルド改!もっと攻めろ!」

ブルド改を操作している少年、大崎コウヤ。

グラディエーターはラウンドシールドでブルド改のグレートアックスを防ぐ。

「ああ!」

「反撃開始だ!」

グラディエーターはグラディウスで攻撃し、ブルド改はグレートアックスで防ぐ。

「ヤバイ!」

「必殺ファンクション！」

『アタックファンクション パワースラッシュ』

グラディウスの剣にエネルギーを溜め、衝撃波を放った。

ブルド改は衝撃波を喰らい、機能停止した。

「やっぱ強いな〜セイタは」

「まあね、これでも練習してるからさ」

「でもさ〜女子と相手だったらすぐ負けるもんな〜」

これを聞いたセイタは顔を赤くする。

「だって僕、女性が苦手なんだよ……」

「だろうね。じゃあ今日はこれくらいにするか〜」

「そうだね、僕用事あるし」

Dキューブは小型化し、コウヤの元に戻る。

二人は住宅街に行き、それぞれ自分の家へ帰る。

しかし、セイタは自分の家とは反対方向に行き、神社へ行った。

（女性は苦手か〜、確かにこのままだと結婚出来ないって叔母さんから言われてるんだよね〜）

そう、叔母にこのままだと結婚が出来なくなると言われた事を思い出し、このままではいけないと思い、克服出来るように神社で神頼みをしに行くのであった。

神社の階段前に着き、上ろうとするが、一段目で止まってしまう。

「本当に神頼みしていいのかな？いいや、このままでは僕の将来に関わる！克服出来るようにしないと！」

少しの迷いを断ち切り、上っていくのであった。

「うう・・・少しキツいかも・・・」

階段が長い事にキツく感じたセイタであった。

神社へ着き、膝を少し曲げ、手を膝に当て、身体を曲げて息を吐いた。

「全く、降りるときは大丈夫だけど上るときがキツいなあ」

賽銭箱の前に行き、ポケットから財布を出す。

「よし、早速神頼みだ！」

財布の口を開け、手を入れて探すように手を動かす。

しかし、小銭が無い事に気付き、少し落ち込む。

「はあ、小銭無いんだった・・・」

財布をしまい、帰ろうとすると、茂みから何か光り出した。

光り出した場所へ行き、それを見た瞬間、セイタは驚く。

それは、アタッシュケースがあつたからだ。

「これは一体……」

アタッシュケースを拾い、開けようとする……

「な、何だこれ！？一体何が……うわぁーーーーー！！！！！」

アタッシュケースが光りだし、セイタを包み、消えていった。

目を開けると、見知らぬ林の所にいた。

「ここは一体……というかもう夜？」

夜になっている事に不思議に思い、持っているアタッシュケースを見る。

「アタッシュケース……そういえば神社で拾ったんだ！」

神社で帰ろうとした時の事を思い出した。

「そうだ！叔母さんきつと心配してるに違いない、電話しよう」

叔母の心配を考え、CCMを取り出すが、電波の所に『圏外』と表示されていた。

「圏外かあゝ、待てよ!？確か神社の所でも電波は立っていた!でも……ここは神社じゃない……」

その時、林の向こうから火の煙が上がり、セイタはこれを見た瞬間、驚く。

「か、火事!？」

セイタは林の向こうへ向かい、着いた時には、ある光景に驚愕する。

そう、民家が燃えていた。

「これは一体……誰がこんな事を……」

すると向こうからひょうたん型ハンマーを持った黄髪のツインテールの少女と紫のショートヘアをした少女がやって来る。

少女が来る事により、セイタは顔を赤くする。

「お、女の子!？」

セイタは後ずさりをする。

「あれ? あけりん、男の人がいるよ!」

「まさか、民の家を放火した奴なのか!？」

少女達がセイタに近付き、セイタは目を少し逸らす。

紫のショートヘアの少女はセイタに尋ねる。

「お前か、火を放ったのは？」

「ええ！？」

突然声をかけられ、少し驚くセイタ。

「僕はやっていない、それに僕が着いた頃には燃えてたし……」

セイタは紫のショートヘアの少女に答える。

「何！？やってないだと！？そして目を逸らすな！！」

「あけりんやめなよ、この人が一人でやれるはずが無いよ」

黄髪 of ツインテールの少女は、紫のショートヘアの少女を抑える。

その時、炎の中から十対の等身大デクーが現れ、スキャッターガン
をセイタに向ける。

「！？デクー！？何でこんな所に……」

デクーが等身大として現れた事に驚愕するセイタ。

デクーはスキャッターガンを発砲し、セイタは林へ逃げる。

「おいお前！」

紫のショートヘアの少女はセイタを呼び戻そうとするが、三体のデクー達はセイタの後を追う。

「こいつら、どうやら通してくれないようだな。ヒデヨシ！」

「分かってるよ！」

デクー達はヘビィソードを取り出し、紫のショートヘアの少女に攻撃するが、かわされる。

そして高く飛び、くないを投げる。

くないは四体デクー達の頭に刺さり、機能停止した。

ヒデヨシと呼ばれた少女は、ハンマーで五体のデクー達を吹き飛ばす。

その頃セイタは、三体のデクー達に追われていた。

「な、何なんだあ！？何が狙いなんだ！？」

そしてセイタは茂みの中に隠れる。

デクー達は、セイタを捜すように動き回る。

「一体どうなってるんだ？等身大のデクーは来るし、女の子がハンマーを持ったり、放火した犯人だと尋ねてきたし！」

そう言いながらアタツシケースを開けると、セイタは中身を見て驚いた。

「これは・・・・・・・・」

その中身はデジタル時計らしき腕輪と四対のLBX、オルテガとタイタンとサラマンダーとズールが入っていた。

「四体のLBXと腕輪？」

腕輪を取り、左腕につける。

すると腕輪が置いてある場所のしたに取扱説明書らしき紙があった事に気付く。

「説明書？早速読んでみよう」

説明書を開き、読み始めた。

「この腕輪、『LBXパワースーツ』っていうんだ。待機状態はこれかぁ。まずはCCMに機器登録をする・・・・」

CCMを開き、機器登録の設定を開いた。

腕輪は反応するかのように電源が入る。

「これか！機器登録・・・・・・・・よし！完了だ！」

腕輪の機器ナンバーが表示され、機器登録完了と表示された。

「次は、自分の持っているLBXを持ち、腕輪にかざすのか・・・」
説明書を読んでるうちにデクーに気付かれ、セイタはアタツシユケ
ースを閉じ、持ってその場から離れる。

「のんびりしてる場合じゃないか！」

デクーがスキャッターガンを発砲し、セイタは逃げ回る。

目の前にもう一体のデクーが現れ、セイタは止まる。

「か、囲まれた・・・」

そしてもう一体着て、ゆっくりとセイタに近付く。

もうダメだと諦めようとするが、説明書に書かれていた言葉を思い
出す。

そう、『諦めなければ希望の光が現れ、諦めれば絶望の闇が迫る』
と。

そして懷からグラディエーターを取り出し、腕輪にかざす。

すると腕輪が光りだす。

「行くぞ！チェンジアーマー！グラディエーター！」

グラディエーターが光りだし、セイタを包む。

その中では、グラディエーターのパーツがセイタに装着し、グラデ

イウスは右手に、ラウンドシールドは左手に持った。

その頃、ヒデヨシ達は……

「あれ？あけりん！向こうの林から何か光ってるよ！？」

「な、何だというのだ……」

既にデクーを全滅させており、向こうの林で光っている事に気付いた。

「行ってみようよ、何か分かるはずだよ！」

ヒデヨシと紫のショートヘアの少女は、光っている場所へ向かった。

そしてセイタは、デクー達の前に出ていた。

その姿は、グラディエーターを等身大にしたような感じであるが、目の部分は開いている。

「これが、LBXパワードスーツ……」

自分の姿に少し驚くセイタ。

デクー達はスキッターガンを発砲し、セイタはそれに反応するかのように横に走る。

「凄い、反応速度が早い」

反応速度が早い事に感心し、一体のデクーがヘビィソードを持って

飛びかかる。

セイタは飛びかかるデクーへ飛び、グラディウスで胴体を真つ二つに斬り、デクーはそのまま爆発した。

「斬っちゃった……」

炎に包まれているデクーを見てグラディウスを見る。

その背後では、ヘビィソードを振り上げるデクーがおり、セイタは気付くようにグラディウスを振り、デクーの首を刎ねた。

そしてそのまま走り、デクーの胴体を突き刺す。

突き刺されたデクーは、機能停止した。

「これがパワードスーツの力……」

そう呟いた後、光だし、元の姿へ戻った。

腕輪を外し、裏面を見てみると、『タイニー・オービット社』のロゴが刻まれていた。

「タイニー・オービット！？ 確か玩具メーカーで、まだ試作だけどCCMのコントロールポッドを開発した会社。まさかこのパワードスーツを……」

タイニーオービットのロゴが裏面に刻まれた事に驚く。

すると二人の少女達がやって来て、セイタは少し目を逸らす。

「今の光は……………」

三体のデクーの残骸を見て、セイタのほうへ向く。

「これは、お前がやったのか？」

少女の問いに頷いた。

「名は何と言う？」

「僕は……………木村セイタ」

少女に名を聞かれ、名を名乗る。

「私は明智ミツヒデだ」

「あたしは、豊臣ヒデヨシ」

二人の少女は名乗り、セイタはその名を聞いて目を細くする。

（た、確か明智光秀と豊臣秀吉は男だよね！？）

心の中では、戸惑っていた。

「そ、それより……………ここは何処？」

ここは何処なのかを、光秀に尋ねた。

「ここは、尾張だ！」

[illegible]

尾張と聞いて驚き、思わず叫んだ。

第一話 運命の腕輪との出会い（後書き）

キタジマ店長のダンボール少年セイタ豆知識

小次郎

「やあ、店長だ。今回は戦国乙女の世界について教えるぞ」

セイタ

「遂に始まりましたね」

小次郎

「ああ、始まった！戦国乙女は、日本であって日本ではない世界。女性が中心となって戦う乱世の世なんだ」

セイタ

「女性が中心って……」

小次郎

「ん？どうしたセイタ、顔を赤くして寝ちゃって。ではまた！バートルスタート！」

第二話 真紅の甲冑と天下統一（前書き）

龍の骨

「二話目に突入だ！」

セイタ

「今回は戦国乙女の主要キャラが出てくるんだよね？」

龍の骨

「まあねーさあ、セイタは女性苦手が克服する事が出来るのか！？」

セイタ

「うう、バトルスタート！」

第二話 真紅の甲冑と天下統一

ミツヒデから、ここは尾張だと聞きセイタは驚いた。

「ここって尾張……そんな！ミソラタウンから結構遠いよ！？」

「みそらたうん？」

「聞いた事が無いね」

ミソラタウンと聞いて首を傾げながら問い、セイタは汗を流す。

「そっか……知らないのか……君達、LBXは知ってるよね？」

「えるびーえつくす？聞いた事がないな」

LBXを知らない二人に目を細くする。

（嘘だろ？LBXを知らないなんて……どうなってるんだ！？）

LBXを知らない二人に戸惑う。

「お前、どうやらこの者じゃないな。我々と来て貰おう」

「え？何で？」

「お前が訳の分からぬ事を言っているからだ」

「訳が分からないって、僕はただ……」

「ヒデヨシ、連れて行け」

こうしてセイタは、尾張の村にある城、安土城まで連れて行かれた。

【謁見の間】

目の前にいるのは、赤いポニーテールに黒いビキニアーマーを着た女性がおり、顔を赤くして少し目を逸らす。

「ミツヒデ、こやつは何じゃ？」

「お館様、この者は民を襲った賊退治に協力した者です」

そして女性はセイタを見る。

「お主、名は？」

「僕は……木村セイタです」

「セイタか、良い名だな。ワシはこの尾張の領主、織田ノブナガじゃ」

「信長あ!？」

信長と聞いて驚くセイタ、そしてヒデヨシとミツヒデはセイタに向く。

「何じゃ？」

「い、いえ……何でもありません（こ、この人が信長だったなんて……）」

表情は苦笑いをしているが、心の中では混乱をしていた。

「それで、お主がミツヒデ達の賊退治に加戦したそうじゃな？」

「は、はい……」

「ん？お主、何故目を逸らしてるのじゃ？」

「い、いや……これには訳が……」

そしてヒデヨシがセイタの前に行く。

「ちゃんと目を見て話さなきゃ」

そして顔をノブナガに向かせ、するとセイタは顔が赤く、心臓の脈打ちが早くなり、気絶した。

これを見たノブナガとヒデヨシは首を傾げる。

その後、セイタは別の部屋に運ばれ、十分で気が付いたという。

「はあ……またか……」

ノブナガと目が合い、気絶した事を思い出し、体育座りをして落ち込んでいた。

「克服しろって言われても、どうすれば良いんだよ。叔母さん……」

叔母に問いかけるように呟き、ため息をつく。

すると戸が開き、振り向くとヒデヨシがおり、セイタは顔を赤くしながらもヒデヨシに向き、顔を少し逸らす。

「さっきはごめんねセイタ。お館を見て気絶しちゃうなんて知らなかったんだ」

「い、いや。ノブナガさんを見て気絶はしちゃったけど、その理由を話すよ……」

「え？」

そしてセイタは、母親によって女性が苦手になった事と女性と目が合ったりすると気絶してしまう事を話した。

「そうなんだ、叔母さんからは克服しないと結婚出来ないと言われ、友人からは独身のままだぞって言われる始末……はあ」

自分に言われた事を思い出し、更に落ち込む。

「ああセイタ！落ち込まないで！」

落ち込むセイタを見て慌てるヒデヨシ。

「うーん……じゃあ、手伝ってあげる」

「え？」

「目を合わせただけで気絶しちゃうんでしょ？」

「え、うん……」

ヒデヨシの言葉に頬を赤くするセイタ。

そして懷に手を入れるが、何か違和感を感じる。

「CCMとLBXが無い……」

「え？」

「!？」

セイタはノブナガと目が合って気絶し、その際にCCMとLBXグラディエーターを落としてしまった事を思い出す。

急いでノブナガのいる謁見の間へ向かう。

「ちょっとセイタ!？」

急に走り出したセイタを追いかける。

（あの時落としたんだっ……壊されてなきや良いんだけど……）

心の中で心配しながら呟いた。

謁見の間へ着き、庄司を開ける。

目の前では、CCMを持って見ているノブナガとグラディエーター
を見ているミツヒデがいた。

「何じゃ？」

「それ、僕のなんですけど……」

「ん？これか？」

そしてミツヒデはグラディエーターをセイタに渡し、ノブナガはC
CMを渡す。

「ところで、何じゃそのからくりは？」

「からくりと行っても、CCMですよ」

「しーしーえむ？そのからくりの名か」

「は、はい……」

顔を赤くしながら答えるセイタ。

「そしてお主の持っている人形は何だ？」

「ああ、これですか？これはLBXです」

「えるびーえつくすじゃと？」

「（ノブナガさんも知らないか）このCCMで、動かせるんですよ」

「ほお、では見せてみる」

そしてCCMの電源を入れ、LBX操作画面にする。

「では、いきます」

するとグラディエーターが動き出し、ノブナガ達は驚く。

持っているグラディウスを縦と横に斬るように振る。

「これは新しいのう」

「人形が動いた!？」

「凄い……」

それぞれ反応を見せるノブナガ達。

「ミツヒデ、こやつに手伝わせぬか？」

「え？手伝うって……」

ノブナガは、玉座の後ろにある赤い兜を取り出し、セイタの足元に置く。

赤い兜を見たセイタは表情を変える。

「これは一体……」

「手伝って欲しいというのは、この甲冑探しじゃ」

「甲冑探し？」

ノブナガは、置いてある兜が織田家に代々伝わる兜であり、真紅の甲冑の云われる文が届き、『真紅の甲冑を纏った武将は、必ずや天下を取れる。しかし纏った武将は神の怒りを買い、命を落とし、甲冑が散逸した』と書かれてある事を教えた。

「その甲冑がそろえば、天下を取れるんですか？」

「そうじゃ、散逸した甲冑がそろえば、兼ねてからの心願であった天下統一の勢いが増し、日ノ本がこの強固な一枚岩に出来るというわけじゃ」

（天下統一……僕はタイムスリップをしたって事か！）

ノブナガが言っていた天下統一と聞いて自分がタイムスリップをした事に気付いた。

「僕、やります！」

「ほおう、手伝うのか」

「はい！」

セイタはノブナガの問いに答える。

「セイタといったな、今からお前はワシの家臣^{モノ}じゃ！」

「ええ！？も、モノって……」

ノブナガの発言に顔を赤くするセイタ。

「何じゃ？顔を赤くして」

「い、いえ！何でもありません！」

「ハハハハハ、面白い奴じやのう」

顔を赤くするセイタに笑うノブナガ。

そしてミツヒデは、林にあったアタツシケースをセイタに渡す。

「これはお前の物だろう」

「え？取ってきてくれたんですか？」

「勘違いするな、さっきの奴等に渡ったらどうなるかわからないからな」

「そんな事言っってホントはセイタに惚れたんでしょ」

「なっ！違う！」

ミツヒデをからかっているヒデヨシを見て苦笑いをする。

その時、マシンガンらしき音がし、庄司が倒れ、ノブナガ達は庄司の方へ向く。

目の前にいたのは、三体の等身大デクーだった。

「またお前等か！」

ミツヒデはクナイを取り出し、構える。

デクーはセイタのアタッシュケースと腕を見て目が光だし、スキヤッターガンを向ける。

「貴様等、何者じゃ」

「お館様！こいつらです。民を襲ったのは！」

「ほおう、こいつ等が……」

デクーはスキヤッターガンをノブナガに向け、セイタは危険を感じ、デクーに体当たりをする。

「おいセイタ！」

「ミツヒデさんは、下がってください！」

「下がるのはお前だ！さっきの者を倒したとはいえ、本当に倒したのか……」

「ミツヒデ……」

そしてノブナガはミツヒデを抑止する。

「行くぞ！」

セイタは懷からグラディエーターを取り出し、腕輪にかざす。

「チェンジアーマー！グラディエーター！」

するとグラディエーターが光だし、等身大のパーツに分離し、セイタに装着する。

前に出てきたグラディウスとラウンドシールドを手に取り、構え、目の部分のゴーグルが下りる。

これを見たノブナガとミツヒデとヒデヨシは驚く。

「おお、これは新しい……」

「さ、さっきの人形がセイタに！？」

「これで林でセイタ君を追っていた奴等を倒したんだ……」

一体のデクーがヘビィソードに切り替え、振り上げて走る。

振り下げた所でセイタはグラディウスで防ぎ、上に弾いて首を胴体に刺す。

刺されたデクーは機能停止する。

もう一体のデクーはスキャッターガンを発砲し、セイタはラウンドシールドで防ぐ。

間合いに迫ったところで首を刎ね飛ばし、身体は膝をついて倒れる。そしてセイタはスキャッターガンで撃っているデクーに向かって走り、タイディシールドを持っている腕を斬り、更にスキャッターガンを持っている腕を切る。

最後に胴体を刺し、デクーは機能停止した。

グラディエーターアーマーは解除され、元の姿に戻った。

「凄いよセイタ！」

「中々の戦いっぷりじゃな」

「……」

セイタの戦いを見てそれぞれ反応するノブナガとヒデヨシとミツヒデ。

その後、セイタはデクーを倒した褒美として部屋を与えられた。

「良いか？お前がお館様の家臣になった以上、役に立てるようにしろ。分かったか？」

「は、はい……」

セイタは目を逸らしながらもミツヒデの言う事に返事をする。

ミツヒデはセイタの部屋から出た。

そしてセイタは仰向けになる。

（真紅の甲冑……全てが集まれば天下統一。でも、天下統一というのは甲冑の力で手に入る物なのかな？）

ノブナガが言う天下統一を疑問に抱くセイタであった。

第二話 真紅の甲冑と天下統一（後書き）

キタジマ店長のダンボール少年セイタ豆知識

小次郎

「やあ、店長だ！今回はセイタが持っているグラディエーターについて教えよう。マシッブなLBXでウォーリアーの後継機のブロウラーフレームでバランスの良さと耐久力を持っている。俺のお気に入りのLBXだ」

セイタ

「僕の誕生日に貰ったんだ。そのLBX」

小次郎

「そうか。ところでセイタ、グラディエーターになった気分は？」

セイタ

「そうですね、自分もグラディエーターになりきっているような感じがします」

小次郎

「俺もなってみたいな。ではまた、バトルスタート！」

第三話 発揮される力（前書き）

龍の骨

「セイタ君が遂に・・・」

セイタ

「な、何！？すごく嫌な予感がするんだけど！？」

龍の骨

「つーことで本編開始っす」

セイタ

「ねえ作者！！！！」

第三話 発揮される力

昨晚のデクーとの戦いでセイタはノブナガに部屋を与えられ、朝を迎えた。

日差しがセイタに向けると起き上がり、着替えて側にあるグラディエーターとCCMを懐に入れ、部屋から出る。

セイタは歩きながら天下統一について考える。

（ノブナガさんが言う天下統一っていうのは、真紅の甲冑を全て手に入るものなのか？ うーん・・・考えても何も始まらないし、とにかく集めよう！）

そう考えながら庄司を開けると、着替え途中のヒデヨシがおり、セイタは赤くする。

「ひゃあ！セイタ！？」

セイタが来て思わず声を上げるヒデヨシ

「ああ・・・ごめん！！！」

そして庄司を閉め、自分の胸に手を当てる。

（ひ、ヒデヨシさんの着替えている所、見ちゃった！）

ヒデヨシの着替える所を見てしまったのか、セイタの心臓の脈が早く打つ。

(ど、どうしよう・・・絶対怒るだろうな)

そう考えると庄司が開き、ヒデヨシが出てくる。

セイタはヒデヨシを見ると驚き、混乱する。

「..＊・?+＊。++++＊+@・?!!!!!!!」

そして言葉にもならない事を声を発し、気絶した。

「ちよつとセイタ!?セイタってば!!!!!!」

気絶したセイタを揺らすヒデヨシ、とそこへミツヒデが現れる。

「ヒデヨシ!これは一体・・・・・・」

「あけりん!これはその・・・・・・セイタが気絶しちゃったの!」

「はあ?またか。ヒデヨシ、貴様何かしたのであろう・・・・・・」

「ええ!?あたし何もしてないよ!」

「ほお、何もしてない・・・・?」

ミツヒデは黒いオーラを漂わせながらくないを取り出し、ヒデヨシは恐怖する。

その後、ヒデヨシはミツヒデに叱られ、セイタは数分後に目覚めたという。

目覚めたセイタは、謁見の間へヒデヨシ達と一緒に行った。

【謁見の間】に着き、セイタはノブナガの前に座る。

「今川軍が桶狭間にいるという知らせがあつて、ワシ等は今から出陣するのじゃ」

「桶狭間に？今川軍・・・・・・・・」

桶狭間と今川軍と聞いて考えるセイタ。

「つて事は戦ですか！？」

「ん？そうじゃが」

これを聞いたセイタは、冷や汗を流す。

（どどどうしよう！戦だよ！？しかも桶狭間で・・・・・・・・僕はLB
Xしか出来ないから素人なんだよぉーーーーー！！！！）

心の中では戦について自分を心配していた。

「それに、お嬢にはワシの軍門に下ってもらわないとな」

（ぐ、軍門って・・・・・・・・話し合いで決着をつければいいのに・・・・・・）

そう思いながらノブナガの話を聞いた。

話が終わり、セイタは自分の部屋へ行ったのであった。

（桶狭間って確か、信長が今川義元を討った場所だよな。そこから天下統一を目指してたんだっけ）

部屋に向かう途中で桶狭間の事を考えるセイタ。

（この世界の今川義元はどんな人だろう、考えてもしようがない！
桶狭間に着いてからにしよう！）

部屋に着き、セイタはアタッシュケースを持つ。

（このアタッシュケースを置いたら城が危ないから持っておこう。
きつとこのLBXも狙われているかもしれない）

そう考えながら部屋を出た。

その頃、ミソラタウンでは……

セイタが住む住宅街に一人の青年が歩いてた。

その青年は、生まれつき銀髪のウルフヘッドに漆黒の瞳、ほどよく引き締まった体格で顔立ちはクール系、ラフな服装が主である。

彼の名は牙神ロウエンであり、ミソラ高校二年の硬派の不良として有名であり、LBXの腕が高い事から『孤高のLBXプレイヤー』として知られている。

（ミソラタウンの住宅街の近くにある神社で少年が消えた噂が流れているようだな。俺には興味ねえよ）

そう考えながら自動販売機に行き、缶ジュースを買った。

神社の階段に上り、着いた後缶を開けて飲む。

（ここは落ち着くな、誰も来ねえしお気に入りの場所だ）

ロウエンは空を見上げる。

（もうあの日はもう、思い出したくない）

飲み終えた缶を捨てに行こうとすると、茂みから何か光る。

それに気づいたロウエンは光っている場所へ行き、隙間を見る。

すると数日前にセイタが拾ったアタッシュケースがあり、ロウエンは手を伸ばし、取った。

「何だこれは？」

アタッシュケースを見て首を傾げ、地面に置いて開ける。

中身はセイタと同じLBXパワードスーツの待機状態と同じ腕輪が入っていた。

「おいおい、こんな高価なモン置いていくなよ」

そう呟くと、アタッシュケースと腕輪が光り始める。

「何だこれは！」

光はロウエンを包んでいく。

「うわあー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

叫びと共にアタツシユケースごと消えていった。

一方、桶狭間では・
・
・
・
・

「うわあ、何だ？」

「凄い数ですね」

セイタとヒデヨシは、崖から今川軍の陣を見下ろしていた。

今川軍の陣にいる兵は、数え切れない程いる。

（ん？傘が開いてる。一体……）

陣の真ん中に傘が開いている事に気付くセイタ。

因みにミツヒデは、ノブナガの命令で城に残っている。

「しっかしヨシモトのお嬢も悠々と茶会たゞ余裕じゃねえか」

「あそこに義元が!？」

セイタはもう一度傘を見る。

（成る程、義元はこれで油断して討たれたんだ）

懐からグラディエーターを取り出し、腕輪にかざす。

そしてグラディエーターは光だし、等身大のパーツとなり、セイタに装着する。

目の前に出てきたグラディウスとラウンドシールドを手に取り、目の部分のゴーグルが降りる。

セイタを見て驚く兵士達。

「セイタ、お主の妖術らしき準備が、兵が驚いておるぞ」

「そ、そうですね……（確かに兵士達は驚いてる。それと、CCMにストリートレギュレーションモードにしてあるから。グラディウスで攻撃しても、怪我はしないし必殺フアンクションを喰らっても死にはしない）」

そう考えながらグラディウスを見るセイタだった。

「行くぞ！ヒデヨシ！セイタ！」

ノブナガは一人で崖から降りる。

「ええ！？ちょっと！」

「あっ！待ってくださいーい！」

後から追うセイタとヒデヨシであった。

傘の下では……

お茶を飲んでいる全身を緑色の甲冑を纏った女性と饅頭まんぜうを食べているピンクのポニーテールの少女がいた。

「雨が止んだようですわねーイエヤスさん」

イエヤスと呼ばれた少女は、頷く。

その時、地震らしき音がし、女性が持っている湯呑に輝が入る。

すると一人の兵士が現れる。

「ヨシモト様！敵襲です！」

「何ですって！？」

ヨシモトと呼ばれた女性は弓矢を取る。

「またあの野蛮人たちですわね！せつかくの気分が台無しですわ！」

敵襲が来て気分が台無しにされたヨシモトは怒る。

その頃、外では……

兵士達の雄叫びが響き、戦っている。

ノブナガは持っている大剣で倒し、ヒデヨシはひょうたん型のハンマーで吹き飛ばし、セイタはラウンドシールドで攻撃を防ぎながらグラディウスで攻撃をしている。

「これが戦か！凄いなあゝ！」

後ろから一人の兵士が剣を振り上げ、セイタは右肘で兵士の原に当て、振り向いて蹴り飛ばす。

「しかも、このスーツも凄いなあ。戦っている内に暴れたくなるような感じ……たまらないぜえ！！」

そして次々とグラディウスで倒したり、蹴り飛ばしたりする。

その時、セイタの前に一本の矢が刺さる。

「な、何だあ！？」

目の前にいるのは、ヨシモトだった。

後にノブナガ達がやって来る。

「ワシにも茶を用意していないのか？」

「今日こそ、その人の小ばかにした態度を、改めさせてあげますわ！」

「えっと、ノブナガさん。この人は一体……」

ヨシモトを見てノブナガに尋ねるセイタ。

「こやつは今川ヨシモトじゃ」

「え、ええーーーーー!!!!!!この人があ!?!」

ヨシモトと聞いたセイタは驚く。

「それと、その変な鎧を着た方は誰なんですか?」

(へ、変な鎧……)

グラディエーターアーマーを変な鎧と言われて少し落ち込むセイタ。

「こやつはワシの家臣じゃ。そして武芸を優れておるからのう」

「ちょっとノブナがさん!?!」

「そうなんですか?」

セイタはグラディウスを構える。

「そういう訳なんです。という事で……お見せします!」

セイタは走り出し、そして跳び、グラディウスを振り上げる。

「うおおーーーーーりやあーーーーー!!!!!!」

「崇敬なる加茂の神紋よ、万物の事象を無に帰す光の障壁となり、我が敵を徒依せん……称呼!!!!!!」

イエヤスは杖を鳴らしながら呪文を唱え、光のフィールド状のバリ
アが現れ、セイタの攻撃を弾く。

「うおお！？何だ！？」

「あたしに任せて！」

ヒデヨシは跳び、ハンマーを振り上げ、バリアに叩く。

力一杯押し、バリアに輝が入る。

「きゃあ！」

「うわあー！」

バリアが破れ、ヒデヨシとイエヤスは弾かれる。

「バリアが破れた・・・」

そう呟くと矢がセイタの足元に来る。

「私が相手ですわよ！」

セイタはヨシモトに向き、見る。

（狙撃銃が得意なLBXは、接近戦には弱いはず・・・弓矢を使う人も弱い。でも相手は女の人、出来るだけ攻撃は避けたほうがよさそうだ）

そう考え、ヨシモトに向かって走る。

ヨシモトは数本の矢をかわしたり、グラディウスで弾く。

「ほらほら！私の矢で踊りなさい！」

ヨシモトは矢を放ち、セイタはかわし続ける。

しかし、一本右腕に当たり、セイタは抑える。

ゴーグルからの視点では、アーマーの耐久力のゲージとチャンスゲージが表示され、ヨシモトの体力ゲージが表示されていた。

さっきの矢が当たったことにより、耐久力ゲージが少し短くなる。

（うう、やられてしまった。けど耐久力はまだある。このままかわし続けていけば・・・）

そう考えている内に二本の矢が胴体に当たり、ゲージが短くなっていく。

それでもかわし続けるが、セイタの疲労の色が見えてくる。

「どうしたんですの？もう終わりですの？」

「まだです！まだまだあ！」

これを見ていたノブナガはセイタに近付き、殴り飛ばす。

「ぐっ、何するんですか！？」

セイタは殴られた頬の部分に手を当て、立ち上がる。

「貴様、何故攻撃しない？」

「すみません、でも女性だから傷つけられないんです……」

「このたわけが!!!!!!」

セイタの言葉に、ノブナガは怒鳴りつける。

「セイタ、あれを見ろ」

セイタはノブナガが向いている方向に向くと、兵士と兵士が戦っている所だった。

「これは……………」

「戦に、男と女は関係ないのじゃ。そんな感情を捨てねば、命取りとなる。覚えておけ！」

ノブナガの言葉に、セイタはグラディウスを見る。

（確かに、兵士達は感情を捨ててまで戦っている。LBXバトルもそうかもしれない……そしてこのストリートレギュレーションモードにしてあるから、ヨシモトさんも傷がつかずに済む。なら……）

セイタはグラディウスをヨシモトに向ける。

「何ですの!?!」

「ヨシモトさん、本気でいきますよ」

「何言ってるんですの？ 私ですわよ！」

「じゃあ行きますよ……」

セイタは走り出し、ヨシモトの放つ矢をラウンドシールドで防ぐ。

間合いを詰め、グラディウスで攻撃し、ヨシモトの体力ゲージが縮んでいく。

「ぐっやりますわね」

ふらつきながらも弓矢を構える。

ヨシモトの体力ゲージはあとわずかになり、セイタはこれを見て目を細くする。

（これはチャンスだ！ ファイナルブレイクを狙える！ 必殺ファンクションが通常よりダメージが多くなるから、流石のヨシモトも響くだろう）

そしてセイタはグラディウスの腰に納刀するような動きをし、腰を少し落とす。

ヨシモトは矢を引き、刃先から緑色の光が出る。

「烈風真空波！！」

叫びと共に数本の矢が放たれる。

「必殺ファンクション！」

『アタックファンクション パワースラッシュ』

グラディウスの刃先から光の球体が出る。

「フアアアイナルブレイーーーーーク!!!!!!!!!!!!!!」

叫びと共に居合い斬りをするように衝撃波を放ち、ヨシモトの放った矢は吹き飛ばされ、そのまま向かっていく。

「い、いやあーーーーー!!!!!!」

衝撃波は直撃し、ヨシモトは吹き飛び、地面に叩きつけられる。

「う、うう」

セイタのパワースラッシュを喰らったヨシモトは立ち上がる。

そしてセイタは変身を解き、ヨシモトに近付く。

「あなた、男でしたの!？」

セイタの姿を見て驚愕する。

「そうだけど……僕は木村セイタ」

顔をそらしながら自分の名を名乗り、ヨシモトは頬を膨らます。

「もう、顔を逸らすなんて失礼ですわよ!」

「許しませんわ!!!!!!」

セイタはヨシモトが放つ矢をよけながら謝るが、ヨシモトはそれが許せず容赦なく矢を放つ。

「うわぁー！ー！ー助けてくれえ！タイタァー！ー！ー！！！」

懷からタイタンを取り出し、腕輪にかざす。

そしてタイタンと共に光だし、タイタンアーマーとなり、ドリルで地面に穴を掘り、入って逃げた。

その後、今川軍と織田軍は退き、ヒデヨシはセイタを探し、川で気絶していた所を発見したという。

おまけ

その夜、セイタはLBXパワードスーツの説明書を取り出し、読んでみて上体を倒す。

「ストリートとスタンダードレギュレーションモードの場合、LBXアーマーをつけてないプレイヤーにファイナルブレイクをかますと服が破れたりする・・・・・・なんで肝心な所を読まないんだろ・・・・・・」

途中まで読んだ自分に恥ずかしいと顔を赤くするセイタであった。

第三話 発揮される力（後書き）

キタジマ店長のダンボール少年セイタ豆知識

小次郎

「やあ、店長だ。今回はLBXパワードスーツについて教えよう。セイタが神社で見つけたアタッシュケースの中に入っていた腕輪、それがLBXパワードスーツだ。待機状態は腕輪で持っているLBXをかざすとそのLBXになれるが、CCMに機器登録しないとなれないんだ。裏側にタイニーオービットのロゴが刻まれているが、謎に包まれているんだ」

セイタ

「・・・・・・・・」

小次郎

「どうした？セイタ。顔を赤くして」

龍の骨

「いや〜ね〜、セイタ君ラッキースケベしちゃったんですよ」

セイタ

「ちょ・・・作者!？」

小次郎

「え？何をやったんだ？」

龍の骨

「まあ、ヒデヨシの着替える所を見てしまったり、ヨシモトを下着

姿にしちゃったりしたんですよ」

小次郎

「え!?!」

セイタ

「あ、あれは事故ですって!?!」

小次郎

「事故とはいえ、覗きと下着姿は感心しないな。女の子は大切にするんだぞ」

セイタ

「うう……はい……」

小次郎

「分かればいいんだ。ではまた、バトルスター……」

龍の骨

「おおっと!ここで皆様に、オリジナル戦国乙女を募集したいと思います!」

小次郎

「まずはこの例を見てくれ」

例

島津ヨシヒロ

イメージCV 大原さやか

容姿 茶髪のショートヘアに顔立ちは童顔で紫色の手甲に両腕に紫の甲冑をつけており、胸はヒデヨシと同じでスカートを履いている。

武器 斧槍『深海』

日ノ本の各地を旅する少女であり、一人称は『僕』。真紅の甲冑を探しているが、その目的は謎に包まれている。姉と妹達はいるが、本人は会わないという。

小次郎

「こんな感じだ。あと、アニメと漫画等の作品をモチーフというのもアリだぞ！因みに島津ヨシヒロは出す予定だぞ！楽しみにしてくれ！」

龍の骨

「感想とメッセージでお願いします。皆様のオリジナル戦国乙女をお待ちしております！」

小次郎 龍の骨

「ではまた、バトルスタート！！！」

次回予告

セイタ

「僕達の前に現れた青年、牙神ロウエン。ロウエンは『孤高のLB Xプレイヤー』として僕の住む世界では有名で、冷たい振る舞いをしているが、それには悲しい過去が……。次回！『孤高のLB

第四話 孤高のLBXプレイヤー（前書き）

龍の骨

「今回は月光閃火さんが考えてくれたキャラが登場します」

セイタ

「では、本編スタート！（どんな人だろう・・・）」

第四話 孤高のLBXプレイヤー

「あれ？ここは・・・・・・・・・・」

セイタは周りを見ると、ミソラ二中の一年二組の教室だった。

そう、ここはセイタのクラスである。

セイタは教室を出て廊下を歩き、他のクラスの教室を見回すが、誰もいなかった。

窓の景色を見ると、まだ日が昇っており、どうして誰もいないのかを疑問を抱く。

「誰もいないのかな？今日はお休みかな？」

懐からCCMを取り出し、開く。

CCMには『月曜日 AM10:00』と表示されていた。

「お休みじゃないのに何で誰もいないんだ？」

疑問に思いながら呟くセイタ。

するとメールの着信音が鳴り、セイタは受信を開く。

件名は『無題』と書いており、それを開く。

そのメールは『話がある。屋上に来てほしい』と書かれてあった。

「送信者はオーディーン……とにかく行ってみるか！」

セイタは屋上への階段に上った。

屋上への扉を開き、目の前には誰もいなく、セイタはメールの送信者を探す。

右に向くと、山野バンがおり、セイタは驚愕する。

「山野……先輩………」

「君が木村セイタ君だね？」

バンはセイタに尋ねる。

「そ、そうです！僕、先輩に憧れてLBXを始めたんです！」

「そっか、君のLBXを見せて」

「え？は、はい」

そしてセイタは懷からグラディエーターを取り出し、バンはグラディエーターを見る。

「中々良いカスタマイズをしてるじゃないか」

「そ、そうですか？僕はその、バランスの良いカスタマイズをしますから」

「おっと、俺が呼んだのはセイタ君のLBXを見に来たんじゃないんだ」

「え？」

セイタはこれを聞いて目を細くする。

「セイタ君、君に伝えたい事がある」

「何ですか？」

「真紅の甲冑を揃えちゃダメだ」

「!？」

バンの発言にセイタは驚愕する。

「どうしてですか!？真紅の甲冑を揃えないと、天下統一が出来なくなりますよ!」

バンはゆっくり首を振る。

「天下統一というのは、そんな物で取るものじゃないんだ」

「じゃあどうやって!？」

そしてバンはセイタに背を向け、そのままドアへ向かった。

「待ってください先輩!先輩!!!」

背を向けるバンを追いかけるセイタだった。

「先輩!!!! あ……………」

気が付くと、そこはノブナガに与えられた部屋だった。

そう、夢だった。

セイタは自分が見た夢について考える。

（山野先輩…………何故真紅の甲冑を揃えてはいけないのですか？
真紅の甲冑の他に、天下統一を取れる物とは何なんですか？）

疑問に思いながら着替え、部屋を出る。

尾張の城から離れた森では…………

「ん…………ん……………」

森で寝ていた青年、ロウエンは起き上がる。

「ここは一体……………」

見知らぬ林を見て不思議に感じた。

「俺は確か神社にいたはず…………!?!?」

神社にいた事を思い出し、隣にあるアタッシェケースを見る。

そして自分の左腕を見て、腕輪がついてある事に気付く。

「腕輪……そういえば神社で変なケースを拾ったっけな」

そう言いながら林の先にある街へ向かった。

森を抜けた街にロウエンは驚愕する。

「な……ミソラタウンじゃない……」

そう、その街は戦国時代にタイムスリップしたような街だからだ。

ミソラタウンではないとロウエンは戸惑う。

（俺は夢でも見ているのか？それとも現実なのか！？）

そう思いながら街に降りようとすると、後ろから足音がし、ロウエンは振り向く。

そこにいたのは、三体のデクーとデクー改だった。

「くっ！こいつら、神谷重工のLBX！なんで等身大なんだ？」

三体のデクーとデクー改の等身大に驚くロウエン。

「こいつら……何で等身大なんだ！？」

デクーとデクー改は武器を向け、ロウエンはアタッシュケースを持って逃げようとするが、アタッシュケースが開き、マニュアルらし

き本が落ちる。

「これは・・・・・・・・」

ロウエンはそれを拾い、読む。

そして分かったかのように本をアタッシュケースの中に入れ、閉める。

「成る程な、等身大では、この腕輪に頼れってか？」

そして懷から自分のLBX、スタイリッシュガンナーを取り出し、腕輪にかざす。

「チェンジアーマー！スタイリッシュガンナー！」

その時、腕輪とスタイリッシュガンナーが光だし、等身大のパーツとなり、ロウエンに装着する。

目の前にあるオートマチックガンを取り、デクー達に向ける。

「覚悟は良いか？」

そしてデクー達は、ロウエンに向かって走っていく。

その頃、セイタは・・・・・・・・

「はぁ！てやぁ！」

「うう！くっ・・・・・・・・！」

木刀を用いてミツヒデと剣術の鍛錬をしているが、押されていた。

「どうした！それでは敵にやられるぞ！」

ミツヒデの攻撃を防ぐが、セイタが持っている木刀が弾かれ、喉元に向けられる。

「うう………」

「セイタ、お前は女の相手になると弱くなっているな。このままでは、敵にやられるのも同然だ」

「そ、そうですね………」

そう言って木刀を拾い、構える。

（うう、やっぱり女性相手だと弱くなっちゃうんだよね。母さんから女の子は傷つけちゃダメよって言われてるし、遠慮しちゃうんだよね）

そう思いながらミツヒデを見ると顔を赤くして目を逸らす。

その時、城の外から爆発音がし、セイタとミツヒデはそれに気付く。

「な、何だ！？」

「城の外からか！？」

「ミツヒデさん、僕は先に行って参ります！ノブナガさんに伝えて

ください!」

「おい!」

そしてセイタは走り、城の外へ出て林に向かった。

一方、林では……

「……………」

デクー達はヘビィソードを構え、ロウエンに近付く。

「……………」

そしてデクー達は走り出し、襲い掛かる。

しかし、ロウエンの姿は消え、デクー達は周りを見る。

上を見ると、ロウエンがおり、武器を構えるが…………

「喰らいな……………」

『アタックファンクション ストームブラスト』

オートマチックガンをデクー達に向け、弾丸の雨を降らす。

弾丸の雨を喰らったデクー達はその場で倒れ、爆発した。

ロウエンが着地し、元の姿に戻った。

「デクー……何でこの世界に等身大として現れるんだ？」

デクーが出たことに疑問に思いながら呟く。

するとそこに、セイタがやって来る。

「あ、あなたは……」

ロウエンはセイタの方へ向き、睨む。

「何だお前は？」

「ミソラ高校二年生『孤高のLBXプレイヤー』牙神ロウエンか！
」

「お前は確か『ウブなLBXプレイヤー』木村セイタか」

「ええ！？何で僕の事を！？」

自分の名を知っているロウエンに驚くセイタ。

「郷田からお前のことを聞いた」

「郷田って……まさか『地獄の破壊神』と呼ばれたあの郷田先輩
！？」

「そうだ、それがどうかしたのか？」

（郷田先輩、ロウエンと同じ高校にいたんだ……）

セイタはロウエンを見て思い出す。

するとミツヒデとヒデヨシとノブナガが馬に乗って現れる。

「セイタ〜！」

「ヒデヨシさん、それにミツヒデさんとノブナガさん」

セイタはヒデヨシ達に向く。

ノブナガは不思議に思うようにロウエンの周りにあるデクー達の残骸を見る。

「これはお前がやったのか？」

「ああ、俺がやった……」

ロウエンはノブナガの問いに答える。

その後、ロウエンと一緒にいき、セイタは謁見の間まで連れられたという。

「で、一つ尋ねたいんだが……」

「ん？何じゃ？」

「ここは一体どこだ？ミソラタウンじゃないようだが……」

「ミソラタウン、という事はお前はセイタと同じということか？」

ロウエンと話してセイタと同じ出身地と認識するノブナガ。

「ここは尾張なんだ」

「はぁ？ 尾張？ バカな、ミソラタウンから来たっていうのか？」

尾張と聞いて少し驚く。

「そうなんだ、しかもミソラタウンというのはないんだ」

「そうか、それと名は聞いてなかったな」

ノブナガ達の名を聞いてなかった事に気付くロウエン。

「お前、名は？」

「俺は牙神ロウエン」

「ワシは織田ノブナガ」

「私は明智ミツヒデ」

「あたしは豊臣ヒデヨシ」

「なっ！？」

ノブナガ達の名を聞いてロウエンは驚く。

「そうか（嘘だろ？ 戦国武将が女だと！？）」

冷静でいるが、内心では戸惑っていた。

「そうだ、ワシの領地に入った奴ら（デクー達）を倒した褒美として、ワシの家臣^{モノ}となれ」

これを聞いた瞬間、ロウエンは立ち上がる。

「悪いが俺はお前のモノになるつもりはない。どうしてもというのなら、俺を負かせてからにしろ」

「ロウエン！ノブナガさんは尾張の領主なんだよ！それに武力もあるしロウエンじゃ勝てないよ！」

「お前と同じなら、問題ないだろう」

ロウエンは左腕の腕輪をセイタに見せる。

「そ、それは！？どこで手に入れたんだ！？」

セイタの問いに答えず、そのまま立ち去っていった。

「ロウエン！」

後から追うようにセイタはついて行った。

「ちょっとセイタ！」

「ヒデヨシ！」

ノブナガは止めるようにヒデヨシを呼び、ゆっくり首を振る。

林では……………

ロウエンとセイタは林に着き、お互い顔を合わせる。

「どうして俺を追うんだ？」

「ロウエン！僕と同じここに飛ばされた同士だ。一緒に戦おう！」

「一緒に？くだらねえ…………俺は一人で、この世界からおさらばする方法を見つける」

「何で！何でだよ！？」

「理由を聞きたければ……………」

懷からスタイリッシュガンナーを取り出し、セイタの前に突き出す。

「俺に勝つことだな」

「くっ！」

そしてセイタは懷からグラディエーターを取り出す。

「分かったよ。君に勝って！仲間にしてみせる！」

「ならやってみろよ。レギュレーションはアンリミテッド」

そしてロウエンとセイタは自分のLBXを腕輪に翳す。

「アーマーチェンジ！グラディエーター！」

「アーマーチェンジ！スタイリツシュガンナー！」

グラディエーターとスタイリツシュガンナーは等身大のパーツとなり、グラディエーターはセイタに装着し、スタイリツシュガンナーはロウエンに装着する。

目の前に出てきた武器を手に取り、構える。

「行くぞ！ うおおー！！！！！」

セイタはグラディウスを振り上げ、ロウエンに向かって走る。

間合いになった所でグラディウスを振るが、かわされてしまう。

そしてグラディウスで攻撃するように振るが、これめかわされる。

（どうしてだ？ どうして攻撃が当たらない！）

攻撃がロウエンにとどかない事に疑問に思いながら攻撃し続ける。

「どうした？　こんな程度か？」

「くっ！まだだあ！」

「無駄だ」

ロウエンはセイタを蹴り飛ばし、オートマチックガンを構える。

オートマチックガンを発砲し、弾はセイタが装着しているアーマーの駆動系に直撃する。

「うわぁー！ー！ー！ー！！！！」

駆動系に当たったことにより膝を落とし、体力ゲージが半分減る。

（ダメージが半分になるなんて・・・なんて性能なんだ！？）

ロウエンが持っているスタイリッシュガンナーの性能に内心で驚く。

（ここは一か八かだ！）

そしてセイタは立ち上がり、ロウエンとの距離を取り、グラディウスを構える。

「行くぞ！必殺ファンクション！」

『アタックファンクション パワースラッシュ』

グラディウスを納刀するように構え、グラディウスの刀先から光の球体が出てくる。

居合斬りをするように衝撃波を放ち、ロウエンに向かっていく。

衝撃波はロウエンに直撃する・・・かのように見えたが、ロウエンの姿がなく、数本の木が切られていた。

「何で・・・まさか！」

気付くように上を見ると、オートマチックガンを構えたロウエンがいた。

「残念だったな、てめえは終わりだ」

『アタックファンクション ストームブラスト』

そしてセイタの頭上にオートマチックガンで弾丸の雨を降らせ、セイタはラウンドシールドで防ぐ。

だが、ラウンドシールドでは防ぎ切れず弾かれてしまい、グラディエーターのアーマーがボロボロになり、弾丸の雨が止んだ後、セイタは膝を落とし、倒れた。

セイタとロウエンは変身が解ける。

「セイタぁーーーーー!!!!!!」

ヒデヨシが現れ、セイタの方へ駆けつける。

「セイ・・・・タ・・・・?」

セイタの姿を見てショックを受けたような顔になり、膝を落とす。

「そいつは生きてるよ、ただ、怪我をしているがな」

ヒデヨシはロウエンを睨み、その場にあったグラディウスを拾い、構える。

「何だ? 今度はお前か?」

「そうだよ！あたしが相手になってやる！」

「悪いがお前と付き合う暇がない」

「こんのおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

グラディウスを振り上げるが、セイタは少し目を開き、ヒデヨシを止める。

「よせ……あいつと戦えば、命取りだ……」

「セイタ!？」

そしてロウエンはその場から立ち去り、セイタは目を閉じ、気絶する。

「セイタ！ セイタってば！ セイタ！ セイタ あー————」

「！！！！！」

その後、ヒデヨシはセイタを城まで運んだという。

第四話 孤高のLBXプレイヤー（後書き）

キタジマ店長のダンボール少年セイタ豆知識

小次郎

「やあ、店長だ。今回はタイタンについて教えよう。タイタンは、キャタピラとドリルというデザインから人気が高いんだ。三話に登場したが、ヨシモトの怒り（？）に触れ、セイタは思わずタイタンアーマーになって逃げたんだ」

龍の骨

「ああ、そのLBX僕も好きですよ。なんていったってパンツァーフレーム。そしてドリル……んゝたまらん！」

小次郎

「そうかくたまらないのかゝではまた、バトルスタート！」

次回の予告。

セイタ

「川中島で戦う二人の武将、武田シンゲンと上杉ケンシンがいた。決闘の途中、ジャッジアーマーを装着した少年、灰原ユウヤが現れる。シンゲンとケンシンは灰原ユウヤに追い詰められる。その時、二人の前にエンペラーM3アーマーの少年が現れる。次回、『川中島のジャッジ灰原ユウヤ』」

第五話 川中島のジャッジ灰原ユウヤ（前書き）

小次郎

「セイタ〜今回はお前、出ないぞ〜」

セイタ

「え!?! 誰が出るの!?!」

小次郎

「それはまたお楽しみに、本編開始!」

セイタ

「えっと、後書きにお知らせがありますので……………」

第五話 川中島のジャッジ灰原ユウヤ

「う、うう……………」

林で一人の少年、灰原ユウヤが気が付き、あたりを見渡す。

「ここは……………」

自分の左腕を見ると、腕輪が付けられており、右手にはLBXジャッジを持っていた。

「僕は……………!？」

何かを思い出したかのように目を細くし、頭を抱える。

「うう!……………ぐっ!う、うわぁ——————」

叫びと共に腕輪とジャッジが光り出し、包まれる。

光が晴れ、ジャッジアーマーが装着され、髪の色が銀色になり、右手にはジャッジソードと左手にはトウルーパーテクターを持っていた。

「お父さん、お母さん。一人にしないで……………」

涙を流し、親を求めるように呟きながら歩いた。

川中島では……………」

兵士達は雄叫びを上げながら戦っており、陣営ではおにぎりを食べ、酒を飲んでいる女性、武田シンゲンがいた。

「おい！もつと持ってこい！」

持ってきて欲しいかのようにひょうたんを前に出す。

そして一人の間者が現れる。

「シンゲン様！」

「どうした？」

「たった今、一人の少年がこっちに向かって来ます」

「何だそいつは？」

「怪我を負った兵によると、黒い鎧を纏い、赤き剣で斬り殺すように進んでおられます。まるで何かを求めるかのように」

「はあ？」

これを聞いたシンゲンは首を傾げる。

シンゲンは自分の鎧を着て立とうとするが、兵士達がやられる声がし、陣営を出ると槍を持った女性が現れる。

そして『風林火山』と書かれた軍配を手に持ち、女性に近付く。

「さっき黒い鎧を着た少年が赤い剣で斬り殺すように進んでいるという事が聞いているんだが、お前か？ケンシン」

「何のことかしら、それよりあなた、真紅の甲冑を探しているんでしょう？」

「ああ、その前にお前の持っている甲冑の一つを貰うぜ」

これを聞いた槍を持った女性、上杉ケンシンは攻撃をしかけ、シンゲンは軍配で防ぐ。

「真紅の甲冑を揃えさせない！」

「それはどういう事だ？」

「ある人が真紅の甲冑が揃うとき、災いが起きると言われたのよ！」

ケンシンは槍をシンゲンに向け、シンゲンは睨みつける。

陣営から離れた丘では、エンペラーM3アーマーを装着した少年がシンゲンとケンシンの戦いを見ていた。

そして何かに気付いたかのようにシンゲンとケンシン戦っている陣営から離れた戦場を見る。

そこには、ジャッジアーマーを装着したユウヤが兵士達を斬り殺して進んでいた。

（ジャッジ……まさか！早く止めないと死人が増える）

そう思いながら丘から飛び降りた。

一方、シンゲンとケンシンはまだ打ち合っていた。

その時、兵士達の叫び声が聞え、二人はその叫び声に向いた。

そこにいるのは、斬り殺した兵士達の血が付いたジャッジーマーを装着したユウヤだった。

「こいつが、黒い鎧を着たガキって奴か？」

「二人にしないで……」

「ああん？」

「うわぁー！！！！！」

ユウヤは叫び、ジャツジソードで襲い掛かり、シンゲンは軍配で防ぐ。

後ろからケンシンが槍で斬りかかろうとするが、トゥループロテクターで防がれ、押し返される。

更にケンシンは軍配で攻撃をし、ユウヤはこれを防ぐ。

「二人にしないで……」

「なっ!？」

涙を流すユウヤの顔を見てシンゲンは少し動揺するが、蹴り飛ばさ

れる。

「一人にしないで……お父さん、お母さん……」

ゆつくりと歩きながらシンゲンとケンシンに近付き、ジャッジソードを前に出す。

「こうなりや……炎龍軍配撃!!!!!!」

軍配を振って竜巻を起こし、再び振り、竜巻が龍の様になり、ユウヤに襲い掛かる。

竜巻で吹き飛ばされたユウヤは、そのまま地面に落ちた。

「ちょっとシンゲン!やりすぎじゃないの!?!」

「これしかなかったんだよ。あのガキは少し眠らしたんだよ」

「はぁ……あなたって人は……」

その時、ユウヤは立ち上がり。シンゲンとケンシンは少し警戒する。

「ふふふふ……」

「何だ?何が可笑しいんだ?」

ユウヤは顔を上げると、笑っていた。

「アハハハハハハ!!!!」

「何だ！？コイツ！」

そして笑いながら走り出し、ケンシンの首を掴み、投げる。

「うわぁ！！！！！」

「ケンシン！……………てめえよくも！」

シンゲンは軍配で攻撃をし、ユウヤはトゥールプロテクターで防ぎ、蹴り飛ばす。

「一人にしないで……………ふふふふ」

幻覚で何かを見たかのようにジャッジソードを振り回し、シンゲンは少し距離を取る。

「一人にしないで……………」

「こいつ、どうなっているんだ！？」

「シン……ゲン……どうやらあの子は危険ね」

投げられたダメージを負いながらもケンシンは立ち上がり、構えた。

「ケンシン、お前大丈夫なのか？」

「心配ないわ。だけど鎧を着たあの子は、何かあったようね」

「はぁ？」

「その所為でああいう状態になってる」

ユウヤの状態を見て少し気付くケンシン。

「うわぁーーーーー!!!!!!」

その時、ジャツジアーマーから緑色のオーラーが湧き上がり、滑走するようにケンシンとシンゲンへ移動し、ジャツジソードで攻撃するが、かわされる。

ユウヤの攻撃を必死にかわすシンゲンとケンシン。

しかし、ケンシンは首を掴まれ、地面に叩きつけられる。

「がはっ!」

そしてユウヤはジャツジソードを地面に刺し、ケンシンの胸倉を掴み、腹に膝蹴りをする。

次に殴り、地面に叩きつける。

「ハハハハハ、アハハハハハハハハ!!!」

「このお・・・!!!!!!」

シンゲンは軍配でユウヤを吹き飛ばし、構える。

「一人にしないで・・・」

「炎龍軍配撃!!!!!!」

シンゲンは炎龍軍配撃を繰り返すが……

「うう……」

ユウヤは地面に刺さっているジャッジソードを取り、そして……

・

「うわぁーーーーー!!!!!!」

『アタックファンクション 炎龍軍配撃』

ジャッジソードでシンゲンと同じ炎龍軍配撃を繰り返すが、炎の龍がシンゲンより大きく、シンゲンは喰らった。

シンゲンと同じ技が使えたユウヤにケンシンは驚愕する。

「ふふふふふ、アハハハハハハ!!!!!!」

「ど、どうなっているんだ？俺の技を……しかも威力が強い……」

「有り得ないわ……」

ユウヤは頭を抱え、苦しむような動きをし、ジャッジアーマーから電氣が出てくる。

「うう……ぐっ……ああ!!!!!!があ!!!!!!」

「あいつ、苦しんでいるのか？」

苦しむ姿を見てシンゲンは少し心配する。

電気が収まり、ユウヤは笑い始め、シンゲン達に近付いていき、ジャッジソードを向ける。

「アハハハハハハハハハハ！……！！！！！！」

そしてジャッジソードを振り上げ、シンゲンとケンシンはもうダメかと目を瞑る。

その時、ジャッジソードに何か当たったような音がし、目を開けると……

エンペラーM3アーマーを装着した少年がハンマーのゴッドランチャーで防いでいた。

「大丈夫か？」

「お前は一体……」

少年はゴッドランチャーで押し返す。

「話は後だ、君達は下がってくれ」

「だけど……」

「その怪我では……君達は死ぬ。それでも良いのかい？」

シンゲンとケンシンは立ち上がり、武器を構える。

「奴にやられてこのまま逃げるといふのは、性に合わないからな」

「やられた分、やりかえすんだから」

「……分かった。好きにしてくれ。その前に言っておきたいことがある」

「何だ？」

そして少年は、ジャッジアーマーを装着したユウヤを止めなければ、ユウヤの精神が崩壊してしまい、命の危険がある事をシンゲンとケンシンに説明をした。

「そうか、つー事は奴の鎧を壊せば良いんだな？」

「ああ、だが壊せるのは僕しかない」

ユウヤはジャッジソードをシンゲン達に向ける。

「灰原ユウヤのアーマー耐久度は半分、君達でユウヤに攻撃してくれ」

「俺達でか？」

「危なくなったら援護する。ユウヤのアーマー耐久度がわずかになつたら合図をし、君達は離れてくれ」

「分かったわ」

シンゲンとケンシンは走り出し、ユウヤはジャッジソードを振り回す。

「一人にしないで・・・一人にしないでえーーーーー」

叫びながらも攻撃し、ケンシンとシンゲンはかわす。

ケンシンは槍で突き、ユウヤはトゥループロテクターで防ぐ。

しかしケンシンの突き攻撃に防ぎれなくなり、トゥループロテクターは砕け、ボディに直撃する。

「喰らいなさい！雷光連撃槍！！！！」

電気に纏った槍で連続の突きを繰り出し、ユウヤは倒れる。

そして立ち上がり、ジャッジソードを取るが、目の前にはシンゲンがいた。

「炎龍軍配撃！！！！！！」

炎龍軍配撃を繰り出し、ユウヤは炎の龍に包まれ、ジャッジソードが碎ける。

「アーマーの耐久力がなくなった、もう良いだろう！後は任せてくれ！」

シンゲンとケンシンはユウヤから離れ、少年は跳びあがる。

「必殺ファンクション！」

『アタックファンクション Ωエクспロージョン』

少年は空中で周り、ゴッドランチャーを地面に叩きつけ、十字の火炎が地面から湧き出てユウヤはそれを喰らう。

「うわぁーーーーー!!!!!!」

ジャッジアーマーは砕け、元に戻り、LBXのジャッジは砕ける。

「……………」

Ωエクспロージョンにケンシンとシンゲンは驚愕する。

「さて…………後はどうするか……………」

少年はユウヤに近付こうとすると、少年の足元に銃弾が当たり、少し下がる。

誰が放ったのかを探すような動きする。

目の前にデクーエースのアーマーを装着をした少女が現れ、ユウヤを抱えてどこかへ行った。

少年は変身を解き、LBXのエンペラーM3が肩に乗る。

「お前、一体何者なんだ？」

シンゲンは少年に尋ね、少年は振り向いた。

「僕は・・・海道ジン」

少年、海道ジンはケンシンとシンゲンに名乗った。

その後、二人はジンに自分の名を教えた。

ジンは違う世界から来たこと打ち明かし、シンゲンとケンシンは驚愕する。

「それじゃあ、噂で聞くセイタという少年と一緒にいう訳なのか？」

「!? セイタ君が・・・」

シンゲンがセイタの噂を話すと、ジンは少し反応する。

「シンゲンさん、そのセイタ君はどこに・・・」

「ああ、多分尾張にいますと思うぜ」

「・・・」

これを聞いてジンは黙りこむ。

「ありがとうございます」

お礼を言った後、ジンは背を向けて去ろうとする。

「待って、ジン！あの灰原ユウヤという子を知っているの？」

ケンシンの尋ねに、ジンは止まり、振り向く。

「知っているが、話すつもりはない。そして気を付けた方がいい。灰原ユウヤと戦った以上、君達はある組織からの標的となったからね」

忠告するように言い、ジンは去った。

シンゲン達から離れた崖では、オーディーンアーマーを装着した少年がおり、見守っていた。

「・・・・・・・・」

そして飛行形態になり、どこかへ飛んだ。

とある森では・・・・・・・・

腹の虫が鳴っており、その場で倒れている青年がいた。

（腹・・・・・・・・減ったぜ・・・・・・・・）

青年はそう呟きながら助けが来るのを待っていた。

第五話 川中島のジャッジ灰原ユウヤ（後書き）

小次郎

「やあ、店長だ！今回は豆知識はおやすみだぞ。それと、お知らせというのは、この後書きコーナーに質問を募集することになったんだ。気になる質問を、俺とセイタとゲストが答えちゃうぞ！差し入れも大歓迎だ。感想、またはメッセーじに書き込んでくれ。ただし、ネタバレの質問は受け付けないぞ。ではまた、バトルスタート！」

次回、『ロウエンの決意』

第六話　ロウエンの決意（前書き）

セイタ

「今回は、ロウエンが遂に……」

小次郎

「おっと、ここまでだ。では本編開始だ!!」

第六話　ロウエンの決意

セイタと戦い、その場を離れたロウエンは、スタイリッシュガンナーを纏って次々来るデクー達やエジプト達を倒していた。

そしてデクーに囲まれ、ロウエンは垂直に飛ぶ。

「必殺ファンクション!!」

『アタックファンクション　ストームブラスト』

デクー達の頭上にオートマチックガンで弾丸の雨を降らせ、デクー達はそれを喰らって爆発する。

そしてうまく着地し、後ろを振り向く。

「これで全部か……」

「ふふふふ、あんたがロウエンかい？」

「!？」

煙が晴れると、インビットアーマーを纏っている青年が立っていた。

青年は変身を解き、ロウエンに近付く。

「流石は孤高のLBXプレイヤー、その腕を持ちながらどこにも就かないとは……もったいないですねえ」

「何を言っている。俺はこのLBXをDキューブ内のバトルよりの性能を発揮させているだけだ。自分がLBXになってな」

「ああ、僕は黒影牙手くろかげがしゅと申します。インビットというLBXを使うのでどうぞお見知りおきを」

するとロウエンは背を向けて去ろうとする。

「ちょっと待ってください？知りたくないんですか？あなたの両親が死んだ原因を……」

これを聞いたロウエンは止まり、振り向いた。

「我が組織の次元盗掘結社タールクス・ハイロウに入れば、あなたの両親が死んだ原因を探る事が出来ますよ」

「……」

「ああ、今すぐではなくても構いませんよ？」

そしてロウエンは、立ち去った。

これを聞いた牙手は、怪しい笑みを浮かべる。

「こりゃ面白くなって来たなあ……ジグレード様が聞いたら、クククク……」

インビットアーマーを纏い、姿を消した。

その頃、尾張の城では……

「・・・・・・・・・・」

セイタはグラディエーターのメンテナンスをしており、ヒデヨシはそれを見ていた。

因みにセイタのアタッシュケースには四体のLBXだけでは無く工具と 그리스 も入っている。

「セイタ？それがめんてなんすって言うの？」

「そうなんだ。戦いの後にメンテナンスをしないと、弱くなったり壊れたりするんだ」

「でも、セイタがその人形の鎧を着けたんだから、必要ないんじゃない？」

「パワードスーツの説明書によると、LBXのアーマーを纏って戦った場合、そのLBXは使った事になるからメンテナンスが必要になるんだ」

「ふう〜んそうなんだ〜」

グラディエーターのボディパーツを取り付け、ドライバーでネジを止める。

「グラディエーター、終わったよ」

話しかけるように呟くセイタであった。

（ロウエン・・・・・・・・あいつはこの世界から帰る方法を探すとか行
ってたな・・・・・・・・どうして・・・・・・・・どうしてなんだ!?!）

心の中ではロウエンの事に対して気になり始めていた。

すると庄司が開き、ミツヒデが立っていた。

「セイタ、ヒデヨシ。親方様がお呼びだ」

「はい」

「分かりました。すぐ行きます」

そしてミツヒデとヒデヨシとセイタは部屋を出てノブナガがいる謁
見の間へ行った。

「セイタ、ヒデヨシ。お主達に頼みがあるのじゃが、ワシとミツヒ
デは駿河へ行くから、こここの留守を頼むのじゃ」

「え？あそこは確かヨシモトさんが収めている所ですよ？何をし
に?」

「ああ、あのデクーとやらの兵の事を覚えているじゃろ？」

「デクーの事ですか？はい」

「そいつらがあのお嬢の街に来ると忠告しに行くのじゃ」

「そうなんですか・・・・・・・・」

するとノブナガはにやけ始める。

「セイタ、留守とはいえ、ヒデヨシとまぐわう事はないようにするのじゃ」

これを聞いたセイタとヒデヨシは顔が赤くなる。

「お館様！そんな事はしませんから！」

「まぐわう！？ひ、ヒデヨシさんと・・・・・・・・・・」

セイタの妄想

「セイタ、あたし身体が熱くなってきちゃったの」

「どういことですか？」

するとヒデヨシは服を脱ぎ、裸になり、セイタは驚いて顔を赤くする。

そしてセイタを押し倒し、服を脱がせる。

「ダメですよ！まだ僕は心の準備が・・・・」

「もう我慢出来ないよぉ」

頬を赤くしたヒデヨシはセイタに迫る。

「ひ、ヒデヨシさぁーーーーーん!!!!!!!!!!」

現実

「ぶはあ!!!!!!!!!!」

セイタは激しい？妄想で鼻血を吹き出して気絶した。

「ちょっとセイタ！？セイタってばあ!!!!!!!!!!」

「セイタ！しっかりしろおーーーーー!!!!!!!!!!」

「面白い奴じゃ」

セイタが鼻血を吹き出して気絶した所を見て面白がるノブナガであった。

ノブナガとミツヒデは城を出て、セイタとヒデヨシは見送った。

その頃、ロウエンは……

「……………」

牙手が言っていた事に悩んでおり、歩いていた。

（俺がああの組織に……もしかしたら俺の両親が死んだ原因が分かるかもしれない……）

「キャアアーーーーー!!!!!!!!!!」

その時、女性の悲鳴が聞こえ、ロウエンは悲鳴がしたところへ向かった。

向かった先には……

「あなた達、こんなことしてただじゃおきませんわよ!!!!!!」

「ただじゃおかないねえ？でも俺達の縄張りに入ったんだから、俺達の台詞じゃねえか？」

金髪の少女が山賊に絡まれていた。

すると一人の山賊が剣を振り上げる。

「金目の物がねえならその体で払って貰うぜえ————!!!!!!」

少女はやられると思い、目を閉じる。

すると山賊が持っていた剣が弾かれる。

「何だあ？」

山賊が左を見ると、オートマチックガンを持ったロウエンがいた。

「テメエ、邪魔しやがって……」

「気に入らないんだよ、お前等を見てて」

「んだとテメエ！やっちゃまえ！」

山賊達はロウエンに向かって走った。

そしてロウエンは山賊達の攻撃をかわしてオートマチックガンで攻撃する。

オートマチックガンを逆さに持ち、グリップで山賊達を次々と叩く。

「こいつ強え・・・」

「何なんだこいつ・・・」

「もう少し遊ぶか？それとも大人しく帰るか」

山賊に銃口を向け、睨みつける。

「お前等、逃げるぞおーーーー！！！！」

山賊達は武器を捨てて逃げた。

ロウエンは金髪の少女に手を差し伸べる。

「勘違いすんじゃない、あの野郎共が気に入らなかったからやっただけだ」

ぶっきらぼうに言うと、少女は頬を赤くする。

「じゃあな、気をつけて歩きな」

「お待ちなさい！」

少女の声にロウエンは止まり、振り返る。

「あなた、名はなんと……」

「俺は牙神ロウエン。お前は？」

「私は北条ウジマサですわ！」

これを聞いたロウエンは少し驚愕する。

（待てよ、北条氏政って女だっけ！？どうなってんだよこの世界はあ—————！！！！）

心の声で戸惑い、叫ぶロウエンであった。

「あなた確か、ロウエンとおっしゃってましたわね？では、私の屋敷に案内しますわ—————！！！！」

金髪の少女、ウジマサはロウエンの手を取り、ロウエンは顔を赤くする。

ロウエンは慌てて手を解く。

「待て！俺はお前達とは違う世界から来たんだ。その帰る方法を探しているんだ！悪いが俺はここで退散させてもらう！じゃあな！」

ウジマサから猛スピードで走るロウエンであった。

「ああ、お待ちになってえー！！！！」

ウジマサはロウエンを追うかのように走った。

ロウエンはどうしているかというところ……

（くっ！何故だ！信長といい、光秀といい、何で戦国武将が女になつてやがる！どうなつてんだこの世界は！）

セイタがいる世界で戸惑いを隠しきれなかった。

「ハア、ハア、もう戻って来ちまったか……」

ロウエンが今いるのはノブナガが治めている尾張だった。

「ハア……振り出しかよ……」

そう言つて尾張の街に入り、歩いた。

その時、ロウエンの腹が鳴った。

（腹が減つたぜ……つてかホントに力が抜けそう……）

そう思いながらロウエンは倒れた。

目を開けると見知らぬ天井に、見知らぬ女性がいた。

「あれ、ここは……」

「ノブナガ様の城です」

「ノブナガの……俺は一体どうしてたんだ？」

「街の道中で倒れている所をセイタ様が城まで運んだそうです」

「道中で……」

そしてロウエンは道中で倒れた事を思い出し、起き上がる。

（あのウブなLBXプレイヤーに助けられるとはな……）

「あの、私はあなたが目覚めるまで看病しておりましたから。それに、あなたには優しさが感じます。何かあれば言ってください」

そう言って女性は部屋から出て行った。

この時ロウエンは、こう思った。

（俺は、最初にこの世界に飛ばされたときに、元の世界に帰ろうと考えていた。だけど、さっきの女は俺を看病してくれた。なのに俺は……）

自分が考える事、そして行動が恥じりながら考えるのであった。

その頃、セイタは……

「うおおーーーー！！！！！！」

「てやあーーーー！！！！！！」

ヒデヨシと共に組み手をしていた。

セイタはグラディエーターアーマーを纏っている。

ヒデヨシの攻撃をラウンドシールドで防ぎ、グラディウスで攻撃し、ヒデヨシはハンマーで攻撃したり防いだりしていた。

その時、一人の兵士が現れ、右ひざを落とす。

セイタは変身を解いた。

「セイタ様、ヒデヨシ様、一大事でございます！黄色の兵士らしき軍隊とそれを率いている黒い鎧を纏った者がこっちに向かって来ます！！！」

「黄色い兵士らしき軍隊……まさかデクーか!？」

「だとしたら大変だよ!!」

「その兵士達は……」

「四十でございます！」

これを聞いたセイタとヒデヨシは城を出て行き、デクーがいる森へ向かった。

森へ着き、正面にいたのは四十体のデクーを率いているインビットアーマーを纏った牙手だった。

「へえ、君が尾張にいるLBXプレイヤー、木村セイタですか？」

「何で僕の名前を知っている!!」

「それは秘密ですよ。それより、ロウエン君を知っていますか？」

「ロウエンは知っているけど、この街にはいないよ!」

「そうですか……では本当にいるかどうか、確かめさせてもらいますよ?」

デクー達はスキッターガンをセイタ達に向ける。

「くっ!行くぞ!チェンジアーマー!グラディエーター!!!」

セイタはグラディエーターを腕輪にかざし、光りだす。

そして光が晴れるとグラディエーターアーマーに装着し、目の部分のゴーグルが下りる。

ラウンドシールドとグラディウスを手に取り、構える。

「ほお!グラディエーターですか。やれ!」

デクー達は一斉にセイタとヒデヨシに向けて発砲する。

セイタはラウンドシールドで防ぎ、ヒデヨシは走ってスキッターガンの弾をかわす。

「はあ!てやあ!」

グラディウスでデクーの胴体を斬ったり、ヘビィソードを弾いて腕

を切り落として首に突く。

そしてソバットキックでヒデヨシに蹴り飛ばし、ヒデヨシはハンマーでデクーを破壊する。

ヒデヨシは回るように振り回し、デクー達を一掃する。

「へえー面白いじゃないですか、ならば！」

牙手は腕に付いている鉤爪で襲い掛かり、セイタはラウンドシールドで防ぐ。

セイタはラウンドシールドで弾き、グラディウスで攻める。

しかし、セイタの攻撃を軽々とかわす牙手。

「甘い甘い甘い甘い！！！！」

鉤爪の上に付いているハンドガンでセイタを吹き飛ばす。

「うわぁー！！！！！！！！」

「セイタ！」

「ガキが粹がってんじゃねえよ。このクソガキ！」

「ぐはぁ！がはぁ！」

そして倒れているセイタを蹴り、ハンドガンで撃つ。

「こんのおーーーーー!!!!!!」

ヒデヨシは牙手に向かって走り出し、ハンマーで攻撃するが、鉤爪で受け止められてしまう。

「はっ！俺達はお前等みたいなガキに付き合っている程暇じゃねえんだよ！」

牙手はヒデヨシを蹴り飛ばし、セイタを踏む。

「ぐはぁ！」

「オラオラどうしたんだよ！さっさとくたばっちまいなこのクソガキ!!!!」

「セイ・・・タ・・・」

「んじゃ、止めと行きますか」

牙手は両腕を揃え、セイタに向けてハンドガンをチャージする。

「恨むならさく真紅の甲冑と一緒に集めろと言ったノブナガさんに恨んでくださいね」

もうダメだと思い、セイタは目を閉じた。

その時・・・

「これがお前等のやる事なのか」

牙手はチャージを止め、声がした方向に向く。

そこにいるのはオートマチックガンを構えているロウエンだった。

「おお、ロウエンさんじゃないですか。我々の組織に入ろうとここに来たんですね!？」

「我々の組織? どういう事なんだ!」

「クソガキ、テメエは黙ってろ」

そしてロウエンはゆっくり近付いていく。

「俺はお前等の仲間になる為に来たんじゃねえ。お前等を倒しに来たんだよ」

「そうですか。残念です」

ロウエンは懷からスタイリッシュガンナーを取り出し、腕輪にかざす。

「チェンジアーマー! スタイリッシュガンナー!!!!」

すると腕輪が光だし、ロウエンを包む。

光が晴れるとスタイリッシュガンナーアーマーを纏っていた。

「俺のバトルは過激にトリッキーだ・・・付いてこれるか?」

オートマチックガンを牙手とデクー達に向けた。

「じゃあガキ共と共に死ねえ！」

「そいつはお断りだ!!」

『アタックファンクション
スタイリッシュ・ドライヴ』

踊るような身のこなしでデクー達は動かなくなった。

「何っ!？」

「行くぞおー！ー！ー！ー！ー！」

『アタックファンクション パワースラッシュ』

セイタは居合い切りをするように衝撃波を牙手に放つ。

そして牙手は素早くかわし、後ろにいるデュー達は切れて爆発した。

「クソガキがあ！いい気になるなよお！」

そう言って残ったデクー達を率いて去っていった。

ロウエンとセイタは変身を解き、ヒデヨシは駆けつけた。

「行くのか？元の世界に帰る方法を探しに」

「いや、俺はこの世界の住人の優しさに触れちまって、帰る方法なんてどうでもよくなってきた。それに、お前等と一緒にいるというのも、悪くないしな」

「ロウエン……」

こうして、セイタとヒデヨシとロウエンは城に戻った。

城に戻ってから数分後、ノブナガとミツヒデが戻ってきて、謁見の間でセイタはロウエンを連れ、訳を話した。

ノブナガは真紅の甲冑を探す事をロウエンに話したという。

「真紅の甲冑を集めれば、天下統一も間違いなして事だな」

「そういう事じゃ」

（真紅の甲冑集めか……面白そうだな）

ノブナガの言う、真紅の甲冑集めに興味を持ち始めたロウエンであった。

第六話　ロウエンの決意（後書き）

キタジマ店長のダンボール少年セイタ豆知識

小次郎

「やあ、店長だ。豆知識の前に質問に答えるぞ。まずは、鳴神　ソラさんからの質問だ。『ネス「セイタさんってお母さんのせいで女性が苦手らしいけど・・・こういう風になのされたの?」ソロ「質問だが、『セイタは原作のダンボール戦機のキャラと何人知り合ってるんだ?」マリオ「セイタに質問、好きなLBXは?」だそうだ」

セイタ

「最初に質問ですが・・・僕は小学校の頃、授業参観の日にお母さんの胸に・・・ああこれ以上は・・・!!!!!!」

小次郎

「・・・・・・・・」

セイタ

「それで次の質問ですが、十人知り合っていますね・・・・・・・・そして最後の質問ですが、好きなLBXはグラディエーターとオルテガです」

小次郎

「そうか、鳴神　ソラさん。ありがとうございます。次は月光閃火さんからの質問だ『ロウエンに質問・・・セイタ以上に異性との付き合いに弱いけど、それってやっぱり過去の出来事と関係するのかな?』ロウエン、どうなんだ?」

ロウエン

「それは……言えない！思い出したくねえ……あれは……」

小次郎

「そ、そうか……月光閃火さん。質問ありがとう。今回の豆知識はオルテガについてだ。サイバーランス製で三角形を基調としたデザインのLBX。不気味な存在感だが、意外に人気が高いんだ。ではまた、バトルスタート！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8956v/>

ダンボール少年セイタ

2011年12月27日22時50分発行